



ベランダ菜園

奈良教育大学の堀田先生よりリレーを引き継ぎました徳島大学の竹内です。連日、猛暑が続いている7月下旬に、家でリレーエッセイの題材を探していたところ、ベランダで育てているミニトマトが目につきました。この原稿が掲載されるのは11月号なので、半年ほど季節がずれますが、このミニトマトを題材に話を進めたいと思います。

今年の春、妻がベランダ菜園を始めました。ホームセンターで、川砂、軽石、液体肥料といくつかの実もの野菜の苗を購入し、必要最小限の水と肥料で作物を育てる“ナントカ”農法の本を読みながらベランダで苗の植えつけをしています。つい最近まで、昨年購入したプランターがベランダに放置されたままでしたが、どうやら今回は本気ようです。途中、強風で苗が折れたりして、どうなることかと思っておりましたが、7月になり、ミニトマトとキュウリを収穫できました。ミニトマトの実は、大きくはないものの甘みとうま味がぎゅっと詰まっており、キュウリの実は、むっちりとしてメロンに似た甘みがありました。どちらもスーパーで買うものとは味も質感も全く別物でした。植えつけた苗は特別なものではなく、ホームセンターで買って来た一つ58円の特売品だったはずですが。作り方一つでここまで味が変わるものかと感心し、ある休日に“ナントカ”農法について少し調べてみることにしました。

今回、妻が用いた“ナントカ”農法は、永田照喜治氏が創始した永田農法と呼ばれる農法でした。テレビや雑誌でもしばしば取り上げられているようなので、ご存じの方も多いかもしれません。永田農法は、一般の野菜作りの方法とは大きく異なり、特に苗の植えつけを独特なやり方で行います。苗の根に付いている土を全て洗い流し、根を半分ほどの長さに切り詰めてから、根をよく広げて痩せた用土（プランターの場合は川砂や軽石等）に浅く植えます。肥料は、基本的に窒素、リン、カリウムの三大要素のみが入っている液体肥料を使い、肥料と水は、必要最小限の量を野菜が欲したときに与えます。このような厳しい環境に追い込むことによって、野菜自体の生きようとする力を最大限に引き出させます。こんな栽培法で本当に野菜が育つものかと半信半疑でしたが、収穫量は少ないものの毎日のように美味しいミニトマトやキュウリが採れているので、野菜の生命力とはすごいものです。

さらに調べていくと、「永田農法で育てたトマトは水に沈む」という記事がありました。早速、我が家で採れたミニトマトを水の入っているコップの中に入れたところ、ミニトマトは見事に沈みました。以前に「地上にできた野菜は水に浮かび、根野菜は水に沈む」と聞いたことがあります。トマトの場合、浮いたり沈んだりするのは、トマトに含まれる糖分（主にショ糖）量により決まります。ショ糖溶液は、水より比重がわずかに重く、糖度6（8）%を超えると沈むようです。また、上の実ほど木全体の栄養が集中しやすいので、木の下の方に生った実よりも沈みやすく、夏物は中身が熟しきる前に



ベランダで育てたミニトマト

外側だけが赤くなって収穫されるため、春物のほうが沈みやすくなります。ここで、ふと、他のミニトマトは浮くのだろうかという疑問が湧いてきました。スーパーで市販されているミニトマトを、水の入っているコップの中に入れてみました。すると、市販のミニトマトも我が家で育てたミニトマトと同様に沈むではありませんか。食べた感じでは、市販のミニトマトの糖度は、我が家で採れたものに比べて明らかに低いと思われます。そこで、トマトが沈む条件をさらによく調べてみると、大きなトマトより小さなトマトのほうが沈みやすく、ミニトマトは、糖度が3程度でも水に沈むということが分かりました。残念ながら、我が家のミニトマトが水に沈むのは珍しいことではないようです。水に食塩などを加えて、溶液の比重を大きくしてやれば、市販のミニトマトのみを浮かせることができたかもしれません。しかし、残念ながら、これらのミニトマトに残された時間はありませんでした。他の夏野菜と一緒に食器皿の上に盛りられるときがやってきました。

永田照喜治氏は、自身の著書で「美味しい野菜を育てるコツは、手をかけないで目をかけることです。子育てと同じです。過保護にしすぎると良く育ちません。水や肥料のやり過ぎに気をつけ、野菜の必要なときに必要な量を与えます。そのためには毎日の観察が欠かせません」と述べています。学生を指導する立場にある者として、学生の教育も似たようなもの（教え過ぎず、必要に応じて最小限の指導を行い、学生本人に考えさせて、一歩離れて見守る）かな〜と、2種類のミニトマトを味わいながら思いました。

今回のエッセイは、在籍期間は重なっていませんが留学先の研究室が同じだったこともあり、学会等で大変お世話になっている群馬大学の森 勝伸先生にお願いしました。ご期待下さい。

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
竹内政樹